

徳川慶勝御手許のペリー来航関連図像と「諸品新聞書」

藤田英昭

はじめに

一 徳川慶勝の御手許文庫とその所収絵図

(一) 「御側御書物目録」の分析

(二) 御手許文庫所収の絵図

二 「朱丸星黒印御箱」の構造と所収絵図

三 「諸品新聞書」所収絵図と水野正信「青窓紀聞」

おわりに

はじめに

当研究所には、十四代当主徳川慶勝が収集した絵図や摺物を貼り付けた「諸品新聞書」⁽¹⁾という全四冊の冊子がある。この冊子には、慶勝が関心を寄せた博物画や、京都風俗、長州戦争に関わる摺物だけではなく、ペリー来航、異国船、尾張藩の軍事関連図像が多数含まれている。

筆者は、昨年度の『研究紀要』において、「諸品新聞書」の基本分析を

徳川慶勝御手許のペリー来航関連図像と「諸品新聞書」

試み、これに貼付されているペリー来航・異国船関連図像をいくつか紹介・分析した⁽²⁾(以下、旧稿と表記する)。

検討の結果、以下のことを指摘し得た。

まず、「諸品新聞書」全四冊のうち巻一―三は、原標題が異なっており、巻一・二は「諸画縮図」、巻三は「海国図絵」で、巻五のみ「諸品新聞書」と表記されていた(現在所在不明の巻四に関しては、旧稿で補足している)。標題は、すべて慶勝の筆で記載されたものである。恐らく慶応年間と思われる時期に、慶勝は自身がまとめた図像集を整理し、「諸画縮図」と「海国図絵」とを「諸品新聞書」として一括したのであろう。

ついで、自身の御手許文庫にある絵図を、慶勝がいくつか選択して、随時「諸画縮図」に貼り付けていたことも明らかとなった。そして、そもそも「諸画縮図」と「海国図絵」とは、ともにその御手許文庫に収納されていた冊子でもあった。複数ある慶勝の御手許文庫のうち、ある時期、「諸画縮図」は「弓矢御本箱」に、「海国図絵」は「白丸印御本箱」に収納されていた。それを取り出し、「諸品新聞書」と一括したものが、全四冊の

「諸品新聞書」であることが明確となったのである。

以上の分析をもとに、旧稿では、「諸品新聞書」の細目録を収載し、貼付図像のうち、ペリー来航・異国関連図像を取りあげ、情報源が判明するものを中心に検討を加えていった。

しかし、慶勝が収集したペリー来航関連図像は、「諸品新聞書」〔諸画縮図〕に貼り付けられたものではなく、その御手許文庫中にも多くを見出すことができるのである。旧稿では「諸品新聞書」の分析を主眼としたため、御手許文庫所収のペリー来航関連図像については、ほとんど言及できなかった。

そこで本稿では、慶勝の御手許文庫目録の基礎的分析を試みるとともに、そこに含まれるペリー来航関連図像を取りあげ、慶勝の問題関心に即しながら、いくつかの絵図を紹介・検討する。そのうえで、御手許文庫所収の絵図と「諸品新聞書」に貼り付けられた絵図との関連性に着目し、旧稿後の調査で判明した事実を指摘したい。とりわけ、「諸品新聞書」に複数存在する同じ図柄の絵図に関して推論を試み、慶勝収集のペリー来航関連図像が持つ広がりについて言及したい。

一 徳川慶勝の御手許文庫とその所収絵図

(一) 「御側御書物目録」の分析

「諸品新聞書」を構成する「諸画縮図」や「海国図絵」が、もともと徳川慶勝の御手許文庫に収納されており、しかも、それらに貼付されないペリー来航関連図像が、御手許文庫にあるのであれば、御手許文庫所収の

絵図を検討しないわけにはいかない。まずは、この御手許文庫を検討したうえで、そこに収納されていた絵図類を紹介しよう。

当研究所には、慶勝の御手許文庫目録が四冊伝来している。

A 「御側御書物目録」(旧蓬左一二六―七三・一)

B 「御側御書物目録」(旧蓬左一二六―七三・二)

C 「目録」(御側御書物目録)(旧蓬左一二六―七四)

D 「御直書本箱初目録」(旧蓬左一二六―二三七)

いずれも、旧蓬左文庫所蔵史料である。A・Cの本文は、慶勝の自筆で、その在世中にまとめられたものとわかる。Cの標題(題簽)も、記載の仕方から見て慶勝自身によるものと見て間違いないが、Aの題簽も自筆の可能性がある。Bは題簽が剥がれてなくなっており(題簽の色が赤色であったことが、剥がれた跡からわかる)、付箋への書き付け(慶勝とは異筆)が標題代わりとなっている。作成時期について、A・Cは幕末期の可能性が高いが、Bの作成時期を特定することは難しい(後述)。Dは慶勝の「往復書」「御日記」「御作詩歌書画」「叢書」や「第十五国立銀行二関スル書類」「写真二関スル書類」などに分類・整理したもので、項目からも判明するように、明治以降、慶勝没後に徳川家の家職によって整理されたものである⁽³⁾。実際に、Dの外題は「慶勝公御直書目録」と名付けられている。

慶勝の御手許文庫を調査し、最初に研究成果をあげたのは、岩下哲典氏である⁽⁴⁾。氏は、C「目録」を分析対象としたので、まずは、氏の研究成果と併せて、Cの基本分析を試みよう。

C「目録」は、青海波紋が配列された表紙・裏表紙に、八行野紙が綴じられた和本である。綴じ方は大和綴じが用いられている。この目録には、書名が箇条書きで列記され、その下に朱丸・朱丸黒・白丸・黄丸・黒丸・

轡(⊕)などの印が付いている(図1)。他にも「金」「銀」「馬」「用」「フントン」「文」「蛇」「蛇丸」などの文字が、書物の下に書かれている場合もある。実は、これらの印や文字が、慶勝の御手許文庫の種類を指しているのである。各印の御文庫については後述するが、文字で書かれた「金」は「金之御簞笥」、「銀」は「銀之御簞笥」、「馬」は「馬御箱」、「用」は「用箱」、「フントン」は「分銅印御箱」を指す。「文」「蛇」は不詳である。そして、C「目録」の丁を繰れば繰るほど、書物を追加していった形跡があり(その場合、「黒朱二重丸御箱追加」「白丸入追加」「赤丸追加」などと立項され、書物が書き加えられている)、慶勝の御手許文庫に書物が集積・追加されていく様子を具体的に知ることができる。

また、書名の頭註には、「△」「×」「○」「▽」「□」などと、さまざまな記号が付されている。これは、御手許文庫の種類を示した印や文字と対応しており、「△」「朱丸」、「×」「朱丸黒」、「○」「白丸」、「黄丸」、「×」「黒丸」、「□」「轡(⊕)」、「▽」「分銅」を示している。慶勝が書物を整理しようとしていた痕跡である。

こうしたことから、C「目録」は、慶勝が自身の御手許文庫を管理するうえで、備忘録として日常的に活用していた文書であったとすることができる。

岩下氏によると、このC「目録」から判明する慶勝の蔵書数は総計三六五部、その内訳は以下の通りという(岩下氏は、書籍の件数ではなく、冊数・枚数を部数として合算している。カッコ内は部数の多い順に記載した)。

海外情報関連(海外情報、ペリー来航関連、外国船ほか関連)	五六部
改革関連(軍学・海防関連、幕政関係、上書、水戸学関係)	一三四部
家政・学芸・教養(算術・書画・漢籍・馬術、家譜・系譜)	七二部

徳川慶勝御手許のペリー来航関連図像と「諸品新聞書」

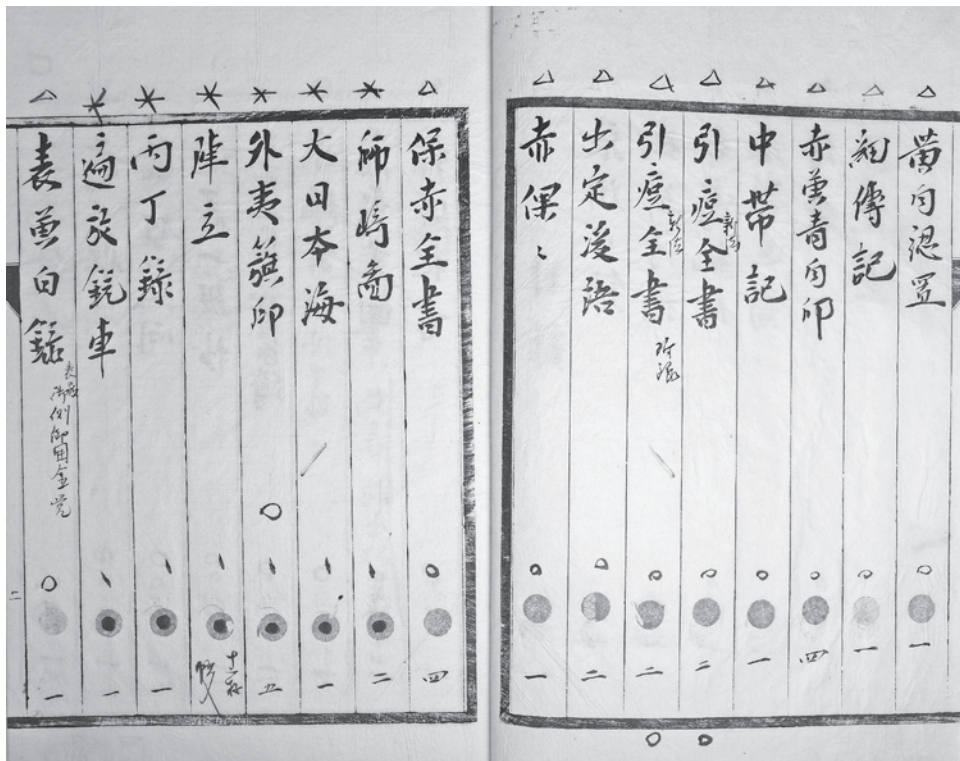


図1 C「目録」

表1 A「御側御書物目録」の内訳

御手許文庫名	件数・部数	絵図件数・部数	絵図名
朱丸印御本箱	39件・52部	0件	
白丸印御本箱	43件・50部	2件・3部	「国郡全国」「海国図絵」
黄丸印御本箱	39件・58部	2件・2部	「内海深淺浜浦図」「見微鏡小蟲真図」
黒丸印御本箱	19件・51部	0件	
轡印御本箱	38件・52部	2件・2部	「伊豆七嶋図」「尾州絵図」
朱竹御本箱	8件・12部	0件	
白丸黒星印御本箱	5件・22部	0件	
御筆箱	6件・13部	0件	
波濤御文庫	14件・34部	1件・1部	「韵府一隅」四冊の項に「当分砲架絵御箱入」
朱丸黒印御箱	29件・61部	24件・55部	「大日本海」「外夷旗章」「陣立」「遍法銃車」「師崎図」「蘭船」「火輪船」「西洋舶半裁図解」「異船絵図面」「蕃舶之図」「日本製バツテラ」「浦賀之図」「墨夷之図」「異品」「米利幹船八艘加奈川入津之図」「異人行列」「蝦夷図」「御備立」「異国船警衛之図」「品川築嶋之図」「クシユンコタン台場之図」「路程便覧」「柳都海岸略図」「日本輿地全図」
分銅印御本箱	12件・22部+@	6件・10部以上	「鷹之絵」「迭魯多兒船軍之図」「異国船并異人之図 表紙附」「異国船并異人之図 表紙ナシ」「内裏図」「御陣立巻物」
総数	252件・427部	35件・67部	

印の意味するところは不明である。

表1は、A「御側御書物目録」に所収される書物の概算を、本箱ごとにまとめたものである。Aも書物の抹消などの書き込みがあるので、蔵書の総数を正確に計ることは難しい(表中の数字は、抹消線があるものも含めて算出している)。また、AにはCに記載された「金」「銀」「用」「文」「蛇」に相当する御文庫目録が記載されていない。それでも、総件数は二五二件、部数は概算で四二七部と、C「目録」より部数が増加していることは、注目して良いであろう。

AとCの罫紙が同じこと、慶勝の筆の運びに共通性が認められることなどを考慮すると、A「御側御書物目録」は、C「目録」との連続性を認めるのに、矛盾点は感じられない。すなわち、C「目録」に追加していった書物を分類・整理し、再度御手許文庫ごとにまとめ直した目録が、A「御側御書物目録」であったと評価することができるようになる。Cに記載されていた「金之御筆笥」などの御文庫がAになくても、冊数が増加していることから、Cの後にAをまとめ直した蓋然性を高くしている。

一方、B「御側御書物目録」はどうか。ここで使用している表紙・裏表紙は、赤・青・黒の絵の具を用いて波状紋を描いたもので、慶勝自身が手がけた可能性も捨てきれない。A・Cと同様大和綴りが用いられている。そして、BもAと同じく、御手許文庫ごとに分類・整理した目録である。耳状に出っ張った茶色紙が、複数小口に貼り付けられ、茶色紙には御文庫の種類を示した印や文字が書かれているので、手早く検索することが可能である。

B本文には、A・Cに共通する「朱丸」「白丸」「轡印」「黄色」「波ノ御文庫(波濤文庫)」が記載されるとともに、それらに見られない「葵御箱」「大

御本箱」「弓矢御本箱」「六番御本箱」「新本箱」などが書かれているのは、看過できない違いである。用紙は一〇行罫紙を使用し、二段組みで書物を記載しており、書物の追加・抹消などの書き込みはない。恐らく、保管用にまとめられた目録ではないか。

先に、B「御側御書物目録」の作成時期を求めるのは難しいと指摘した。ただ、旧稿では、安政三年（一八五六）五月前までに、この目録が作成されたものと見た。もとより、それは目録に記載された書物が、安政三年までに慶勝の手許にあったことを示したもので、目録をまとめあげた時期とは必ずしも重ならない。書物自体は幕末期に集積したとしても、目録の作成がそれ以降であることは当然ありうることで、事実、慶勝の筆蹟や整理の仕方、文庫の種類や罫紙の違いなどから勘案すると、幕末期というより明治以降にまとめられたとみたほうが自然である。ここに、旧稿の指摘を訂正しておきたい。

参考までに、B「御側御書物目録」の内訳を表2に示した。Bには書物の部数が記載されていないため、総数は計れないが、総件数はAよりも増えており、A以降の御文庫の様子を反映したものと認められる。

したがって、慶勝の蔵書は、C↓A↓B↓Dの順で目録を検討することで、集積過程や整理状況がある程度把握することが可能といえる。

（二）御手許文庫所収の絵図

以上の考察をもとに、これまで十分に検討されてこなかった御手許文庫所収の絵図を確認していきたい。

表1・表2には、A・Bの「御側御書物目録」に含まれる絵図の件数（お

表2 B「御側御書物目録」の内訳

御手許文庫名	総件数	絵図件数	絵図名
葵御箱(桐箱)	22件	1件	「水源村々略図」
馬御箱	27件	2件	「鶴画」「騎射小手画」
朱丸御本箱	46件	1件	「英人」
白丸御本箱	31件	2件	「国郡全図」「海国図絵」
轡印御本箱	32件	3件	「伊豆七嶋」「火輪船」「絵図品々」
黄丸御本箱	39件	1件	「海浅深図」
大御本箱	30件・70部	2件	「尾江茶席略図」「人物略画式」
弓矢御本箱	37件	25件	「浦賀異船」「外国旗印」「長沼軍法」「軍法」「師崎」「大日本海」「浦賀図」「路程」「火輪船」「海岸略」「内裏」「フレガット船」「蕃舟」「輿地」「備立」「異品一卷」「異人巻物」「加奈川入津」「彼里」「行軍」「ケーキトイン戦船」「諸画縮図」「騎射小手」「西洋舶図」「貌里瓦埵陣」
六番御本箱	5件	0件	
銀之御簞笥入	8件	0件	
用箱 在江戸	4件	1件	「尾下屋敷図」
別箱	3件4箱	3件	「清朝中外輿地全図」「江戸切絵図」「尾張領絵図」
波ノ御文庫	12件	0件	
金ノ御簞笥入	60件	2件	「東海道御自画」「師崎海岸」
新本箱書画	15件		
総数	371件	43件	

よび部数」と名称を示している。表1・表2を比較することで、絵図の追加集積や、収納場所の移動などがうかがわれ興味深いが、ここではAの内容を示した表1に基づいて、ペリー来航に関わる絵図を取りあげよう。その際、可能な限り慶勝の関心・志向・立場に引きつけて、慶勝の手許にある必然性を考慮しながら、絵図を検討していきたい。

「白丸印御本箱」に収納された「海国図絵」は、のちに「諸品新聞書」巻三と改称する図像集で（詳細は旧稿参照のこと）、厳密には一枚物ではなく冊子であるが、絵図を貼り付けたものとして数に加えた。貼付絵図の詳細は、旧稿に細目録を付けたので参照されたい。

「黄丸印御本箱」に収納された「内海深淺浜浦図」⁽⁶⁾は、読み方「うちうみしんせんはまうらのづ」と、A目録に付されている。九六・一×六五・七（cm）の大きさである。江戸内海はもとより、房総半島・三浦半島・伊豆半島・八丈島・三宅島などに配備された御台場を網羅的に記し、御台場間の距離も示した摺物である。「斯図、水路ノ遠近ヲ一日ニ瞭然タルコトヲ主トシ、魚獵ニ浮遊スルモノ浅深ヲ知ンカ為ニス」と註記されている。慶勝が国許知多半島周辺の海防だけではなく、江戸湾の海防態勢にも意を用いていたことをうかがわせる図像である。

ついで、「分銅印御本箱」に収納される「迭魯多兒船軍之図」は、正式には「迭魯乙多兒」⁽⁷⁾（「デロイテル」と記載すべきものである。「デロイテル」とは、一七世紀中葉のオランダ海軍提督ミエール・デ・ロイテル（一六〇七〜七六）のこと。一六七二〜七三年にかけての、第三次英蘭戦争において、オランダがイングランド・フランス連合艦隊を撃破した海戦の様子を描いた絵ではないかと思われる。旧稿でも指摘したように、慶勝が大船に強い関心を持ち、その建造論者であったことを裏付ける絵図ともい

える。なお、関連書物として、「轡印御本箱」に「迭魯乙多兒一世紀」が収納されている⁽⁸⁾。慶勝が、関連文書ごとに御手許文庫を整理・収納していたわけではなかったことをうかがわせる。文庫の大きさが関係するのかどうか、その意図はつかみにくい。

同じ御文庫中の「異国船并異人之図」については、表紙の有無に拘わらず、図像を特定することは難しい。

同じく「御陣立巻物」は、尾張藩で実施されていた軍事訓練に関わるものか。名古屋市蓬左文庫には、「陣立図」が多数所蔵されているが、本図が「巻物」であるのが手掛かりとなる。この点、「備押之図」⁽⁹⁾（一三〇〜七一五、二八〇・五×二七・三cm）は巻物に該当する。

特筆できるのは、「朱丸星黒印御箱」に二四件・五五部もの絵図が収納されていたことである。表1に示したごとく、部数六一部のうち、絵図が五五部とあるので、この箱は絵図専用のそれであったと見なせる。しかも、ペリー来航関連図像を多く含んでいる。これに関しては、章を改めて検討しよう。

なお、ペリー来航関連とはいえないが、「黄丸印御本箱」所収の「見微鏡小蟲真図」について、言及しておきたい。これは、恐らく当研究所蔵「群虫真景」⁽⁹⁾（折本、旧蓬左二二六〜一二三）に相当するもので、実際に顕微鏡を使ってハエやクモなどの小動物を観察し、模写した絵が写實的に、まさに「真」に迫って描かれている博物画である。絵自体は慶勝の筆とは考えにくいものの、虫の名前などの詞書きは慶勝によるものである。頁を繰ると、慶勝と同時代に生きたチョウ・ガ・トンボ・ミノムシなどが、押し花ならぬ、押し虫⁽¹⁰⁾のように貼り付けられた標本もある。これらは、慶勝の「写真」探究の一環で収集・作成されたものである。

「真」に迫ろうとした姿勢は、小動物に向けられただけではない。ペリー来航を視覚的に捉えようとしたこと、関心のある大船図像を収集するだけではなく、その構造を細部にわたるまで把握しようとしたこと（後述）、これらもその姿勢に直結していたことは疑いない。慶勝にとっては、この延長線上にフォトグラフィーがあったのである。

二 「朱丸星黒印御箱」の構造と所収絵図

表3は、A「御側御書物目録」に記載の「朱丸星黒印御箱目録」を一覧にし、所蔵先と史料番号を明記したものである。標題を色づけしたものが絵図なので、この「御箱」に収納されていたほとんどが、絵図であったことは一目瞭然である。^⑪

表3には、C「目録」に記載された情報を一部示している。Cの頭註に「○」印などが付けられていたことは前述したが、「朱丸星黒印御箱」収納の蔵書には「✕」が付けられていた。表3でいえば、①から⑬がそれに該当する。

二重線は、C「目録」における記載状況の違いを示したものである。これも前述したとおり、Cは書物の追加状況がうかがえる目録であった。つまり、Cでは、表中の①から⑦をまとめて列記したあと、白丸印や黄丸印など、他の御手許文庫に所収された書名が列記されている。その後、「別箱」という項目に記載されていた六八件のうち、⑧から⑬の絵図六件を「朱丸星黒印御箱」に収納する指示書きが、印や文字などで示されている。^⑫

ついで、「黒朱二重丸御箱追加」という項目が立てられ、新たに集積した絵図など⑭から⑳を「朱丸星黒印御箱」に収納する旨、明記されている。

要するに、「朱丸星黒印御箱」は、二回にわたって書物（絵図）が集積されていったのである（㉔については不明）。こうした事実から、慶勝が海防・軍事やペリー来航に関わる絵図を一括して整理しようとした意図をうかがえる。冒頭でも指摘した通り、慶勝の御手許文庫に収納されていた絵図で、「諸画縮図」（↓「諸品新聞書」）に貼り付けられたものも、表3の備考欄に示した。「朱丸星黒印御箱」所収の絵図では、⑤「遍法銃車」（遍放銃車図）、⑫「日本製バツテラ」、⑬「クシユンコタン台場之図」がそれに該当する。

⑭「品川築嶋之図」や⑮「柳都海岸略図」は、同様の絵図を「諸画縮図」からも見出すことができるが、単体で存在するものを所蔵先に示した。

それでは、「朱丸星黒印御箱」所収の絵図のいくつかを具体的に見てみよう。分析視点は、先に示した通りである。

③「陣立」の帙には、収納先の朱丸黒印が付けられている。目録には「十二枚」と記載されるが、実際は一二冊の折本である。表紙が、第一章で指摘したA「御側御書物目録」と全く同じ亀甲状の紋様が配列されたもので、慶勝の所持品であることを裏付ける。事実これは、慶勝自身が書き付けた折本で、ここには「船軍」「魚鱗衡輓」「立花」など、中国の兵法による陣形が描かれている。注目すべきは「船軍」とあることで、尾張藩で実施していた知多半島での水軍訓練にも無関係とはいえない。その他、訓練では江戸の戸山屋敷における実施記録も残されているので、それらとも関わる絵図であったかもしれない。

⑥「師崎図」は二点あり、それぞれ標題は異なっている。一つは、題簽に慶勝の筆で「師崎内外」（旧蓬左二二六—一九八、八八・四×七五・五cm）と書かれたもの、もう一つは、同じく慶勝の手で「師崎図」（旧蓬左二二六—一九九、一一七・七×一一一・六cm）と記載されたものである。ともに絵図の裏

表3 朱丸星黒印御箱目録

	番号	印	標題	数	所蔵先・史料番号	備考
	①	✕	大日本海	1	林政史(旧蓬左36-128)	
	②	✕	外夷旗章	5		
	③	✕	陣立 帙入	12枚	蓬左133-11	
	④	✕	丙丁録	1	蓬左148-1	
	⑤	✕	遍法銃車	1	林政史(旧蓬左126-64)	「諸画縮図」(「諸品」巻一)貼付
	⑥	✕	師崎図	2	林政史(旧蓬左126-198・199)	
	⑦	✕	蘭船	1	蓬左36-132	
「別箱」	⑧	✕	火輪船	1	蓬左36-127	標題は「火輪船略図」
	⑨	✕	西洋舶半裁図解	1	林政史(旧蓬左126-168)	
	⑩	✕	異船絵図面	1袋		
	⑪	✕	蕃舶之図 袋入	4	蓬左1025	
	⑫	✕	日本製バツテラ	1	林政史(旧蓬左126-64)	「諸画縮図」(「諸品」巻一)貼付
	⑬	✕	浦賀之図	2		
追加分	⑭		墨夷之図	1	蓬左36-123	標題は「アメリカ人図」
	⑮		異品	1	蓬左36-121	
	⑯		米利幹舶八艘加奈川入津之図	1		
	⑰		異人行列	1		
	⑱		亜墨利加一条内密書	1	林政史(旧蓬左126-178)	
	⑲		蝦夷図	5枚		
	⑳		御備立	5枚		図4枚・書付1枚(C「目録」より)
	㉑		異国船警衛之図	5枚		
	㉒		品川築嶋之図	1枚	蓬左830 ?	「諸画縮図」(「諸品」巻一)にも貼付
	㉓		クシユンコタン台場之図	1枚	林政史(旧蓬左126-64)	「諸画縮図」(「諸品」巻二)貼付
	㉔		算術九之帰法	1枚		
	㉕		路程便覧	1枚	蓬左36-158	標題は「関東八州路程便覧」
	㉖		御錢別御出来物覚	1枚		
	㉗		柳都海岸略図	1枚	蓬左1023	「諸画縮図」(「諸品」巻一)にも貼付
	㉘		桑名侯上書	1		
	㉙		日本輿地全図	1	蓬左36-156	

「数」の単位は史料表記のままとした。

表紙に朱丸黒印が付されている。師崎は知多半島の先端にあった村名であるが、「師崎内外」の図は、必ずしも知多半島を中心とした絵図ではなく、むしろ、伊勢湾に浮かぶ菅島・答志島・坂手島への砲台配備などの様子を描いている。つまり、志摩国鳥羽藩の海防態勢の一端を示した絵図なのである。神島周辺の海には「此辺深ク五十丈余」、「此辺大船ハ先へ不通」などと、大船が往来可能かどうか注目した記載もある。

一方の「師崎図」も知多半島だけではなく、三州・勢州の海岸線と三河湾・伊勢湾の島々を記して、船着場までの距離を示すとともに、海底の深浅を表した絵図である。この二点は、慶勝が海底の深さに意を配っていたこと、他藩の海防状況を把握した上で、広い視野を持って、知多半島の海防態勢を構築しようとしていたことを示唆する絵図なのである。¹⁴

西洋船への関心は、⑦「蘭船」や⑧「火輪船」の存在からもうかがえる。「火輪船」とは蒸気船を意味している。⑨「西洋船半裁図解」(二〇三・五×七九・五cm)は、A目録で「せいよふはくはんさいづしき」とふりがなが振られている図像で、文字通り、西洋船を半分に割って内部構造を詳細に図解したものである。船体部位名と図とが照合でき、まさに慶勝が、西洋船の「実態」(「真」の姿)を細部にわたって観察しようとしたことがうかがえる図像である。

⑩「異船絵図面」は、図像を特定するのが難しい。目録に「一袋」とあるので、雑多に袋入りされていたものであろう。このなかの一部は、「諸画縮図」(「諸品新聞書」)に貼り付けられた絵図もあったかも知れない。

これに対し、⑪「蕃舶之図 袋入」(四点)は、図像の特定が可能で、包紙ともども名古屋市蓬左文庫に所蔵されている。包紙には慶勝の筆で「蕃舶之図」とある。図の内訳は、a「軍艦凡型」(三九・〇×二六・九cm)、b「軍

船二候哉如此之船壳艘相見へ候由」と記載のあるもの(三八・八×二七・〇cm)、c「蒸気船凡型」と標題があるもの(三八・八×二七・九cm)。dは標題がなく、「日本之銅瓦ノ如ク鐵ノ板ヲ以、総舳無残所張有之」、「総長サ五六十間」と註記がある蒸気船である(四三・〇×三一・〇cm)。四図は、蒸気船二隻と軍船二隻に分けられており、嘉永六年(一八五三)のペリー艦隊を実見したもののか。ただし、絵図の作者は不詳。当時、慶勝は国許にいたが、何時、いかなるルートで収集したのか、現状でははっきりしない。なお、a・b・cと同じ絵図が、「諸画縮図」巻二(「諸品新聞書」巻二)に貼り付けられているので、慶勝は同じ図像を複数所持していたこととなる。

⑭「墨夷之図」、⑮「異品」は、嘉永七年のペリー再来航に関わる図像である。ともに卷子仕立てで、⑭は七九一・〇×二八・四(cm)、⑮は六七九・八×二六・五(cm)の大きさである。

⑭の題簽に「アメリカ人図」とあるように、アメリカ人土官が中心で、なかには「アーダムス小柳ノ腹ヲラシ試ムル図」「アーダムス相撲象ヶ鼻ノ持運フ米俵ヲ揚ケントスル図」「異人相撲見物之図」なども描かれている(図3)。この画題は、再来航の際にアメリカ人から贈られた電信機や機関車などに対して、日本から返礼として贈られた品々と関わっている。日本の返礼品には、漆器類や絹織物が多かったが、よく知られているように、その中には食糧品として米俵二〇〇俵も含まれていた。この米俵を持ち運んだのが、ここに登場する相撲取りたちであった。¹⁵

では、慶勝はこの画題の意味を理解できたのであろうか。実は慶勝は、この絵巻のほかにも、表3⑱「亜墨利加一条内密書」¹⁶を入手して、下記に示したような状況をしっかりと把握していた。

右船中之惣異人江被下品之内、御米五斗入俵之由、式百俵程飯家前左



図3 「アメリカ人図」(部分) 名古屋市蓬左文庫所蔵

り脇小土手際江積上ケ有之候由之処、異人上中官応接所江通り候以後
 ニも候哉、兼而御呼寄ニ相成居候相撲共、素裸取廻シニ而出立、右式百
 俵程之御米、壹人式俵ツ、両手ニ携、或ひハ肩ニ懸、又者御米積上ケ
 候俵坏江上リ、陸地ニ罷在候相撲共之内江投与へ坏致、皆々異人乗来
 候ハツテイラ際浜手迄運送いたし、異人江相渡候由之処、右異人共壹
 俵ニ両三人懸リニ而端船江釣込候由、其後応接仮家後口之方ニ土俵場を
 為設、同所おいて俗ニ幕之内与相唱候相撲共、小柳常吉を初メ、三人
 請或ひハ式人請坏与申相撲稽古取坏、并戸登也対馬守初好之由ニ而相始、使節
 其外上官之分仮家裏窓へ見物為致、異人共儀も暫興ニ入候躰哉ニ而詠
 居候由

この絵以外にも、ペリー以下将官の半身像、ミンストレルショー図、国
 旗や楽器、ストープなどの器具も雑多に描かれている。横浜で行われた調
 練に関する図像もあり、それには「士大将コンマンダント 歳六十計リ丈
 六尺タラズ 調練指揮之図」と標題があり、「甲寅三月上浣写金河橋居
 藍橋」と、嘉永七年三月上旬に神奈川の仮宅で「藍橋」なるものが写した
 と記されているが、「藍橋」については不詳である。後考を俟ちたい。

また、横浜応接所の見取図も画かれており、これは横浜開港資料館所蔵
 「黒船来航画卷」と同様の構図で、幕府役人の配置も詳細に描かれている。
 ⑬
 他の絵も何らかの原図をもとに模写したものと想定される。絵の筆致も異
 なることから、複数の者が制作に関わったものであろう。

いずれにしても、相撲の取り組みに驚嘆しているアメリカ人の様子(図
 3)や、図4を見てもわかるように、この絵巻は、アメリカ人に対する日
 本人のある種の偏見が反映されているように思えてならない(特に目の表
 情)。アメリカ人と直接面会したことがなかった慶勝だけに、視覚に訴え

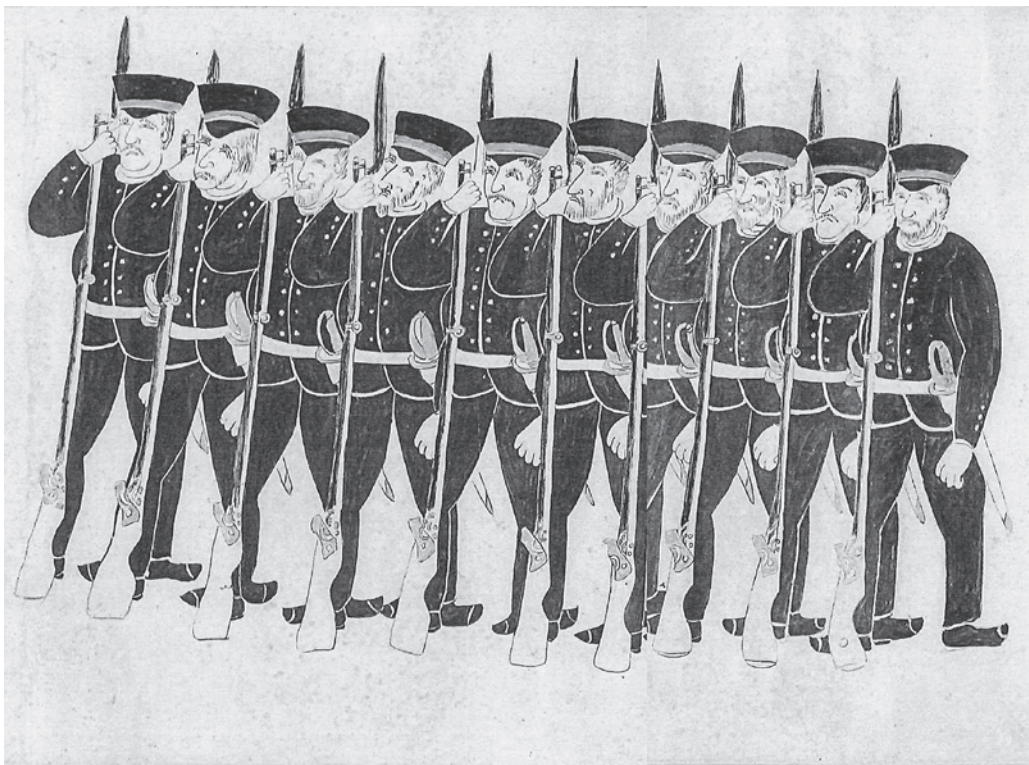


図4 「アメリカ人図」(部分) 名古屋市蓬左文庫所蔵

た絵巻は、かえって強く心に刻まれ、その対外意見にも影響を与えずにはおかなかったのではないか。

次に⑮「異品」を見よう。題簽には「アメリカ人衣冠図」とあるが、「異品」という標題が、直接卷子に書かれている。内容は、およそ以下の六つで構成されている。

(1) 「亜墨利加人衣冠其外共凡之図画」

「使節冠之」「指揮冠」「海軍冠」「上官冠常用」「下官常冠」「水主冠」「腰差小銃」「釵筒差」「釵」「楽器ノ内太鼓」「小太鼓」「大小太鼓バチ」「ジャガラ」「笛」「上官衣」「指揮衣」「海軍士衣」「童子衣」「下官衣」「股引」「鞋」など

(2) 「異人ヨリ公義^{マヤ}江献上物」

「農具」「農具ノ内 トウミ」「テレガラフ(電信機)」「蒸気車(炭水車・客車とも)」「農具ノ内 鋤・鍬」「紅バツテイラ(救命艇)」など

(3) 「献上品ニテハナシ」

「刃モノヲトグニ用ル(砥石器)」「バツテイラカイ(櫂)」「船印(国旗)」「水入(樽)」

(4) 「諸冠頭上ノ図」 * (1) に洩れたものを描く

「海軍士衣前向ノ図」「同 股引」

(5) ベリー艦隊

「ホウハタン蒸気使節船(ポーハタン号)」「セチクインナ(サスケハナ号)」「ミスシスシツピ(ミシシッピ号)」「レキシスタン(レキシントン号)」

(6) 「武州久良岐郡横浜村応接所仮家 異人上陸ノ略図」

このように、⑮「異品」には、アメリカ人の軍服・軍帽や献上品、ペリー

徳川慶勝御手許のペリー来航関連図像と「諸品新聞書」

艦隊などの絵が描かれている(図5・口絵3)。⑭とは対照的に、ここには人は描かれず、アメリカ人の文明・風俗に関わるモノが中心である。西洋軍艦はもとより、電信機や蒸気車などの機械製品は、慶勝の関心を引いたであろうことは想像に難くない。

ところで、この「異品」と同じ図柄の白描図を「諸品新聞書」巻二(「諸画縮図」巻二)の中から複数見出すことができる。御手許文庫所収の絵図が「諸画縮図」に貼り付けられていた事実を踏まえれば、相互に関連性があつて然るべきだが、この白描図は、実は同じ図柄のものが何枚も存在しているのである。なぜ同じ図像が何枚もあるのか。次章では、改めて「諸品新聞書」所収絵図に注目し、とりわけ、「異品」で描かれた図像に類似する白描図を検討してみたい。

三 「諸品新聞書」所収絵図と水野正信「青窓紀聞」

「諸品新聞書」巻二(「諸画縮図」巻二)には、同じ画題を描いた図像が複数存在する。

a 「(アメリカ人軍服・軍帽図)」 三枚

b 「(アメリカ人軍服・蒸気船部分・バツテイラ図)」 二枚

c 「軍船図」 二枚

d 「蒸気船使節船」 三枚

e 「(ボート砲図ほか)」 二枚

f 「献上船形大略(バツテイラ船三艘)」 二枚

g 「軍船略図」 三枚

h 「(横浜応接図)」 三枚

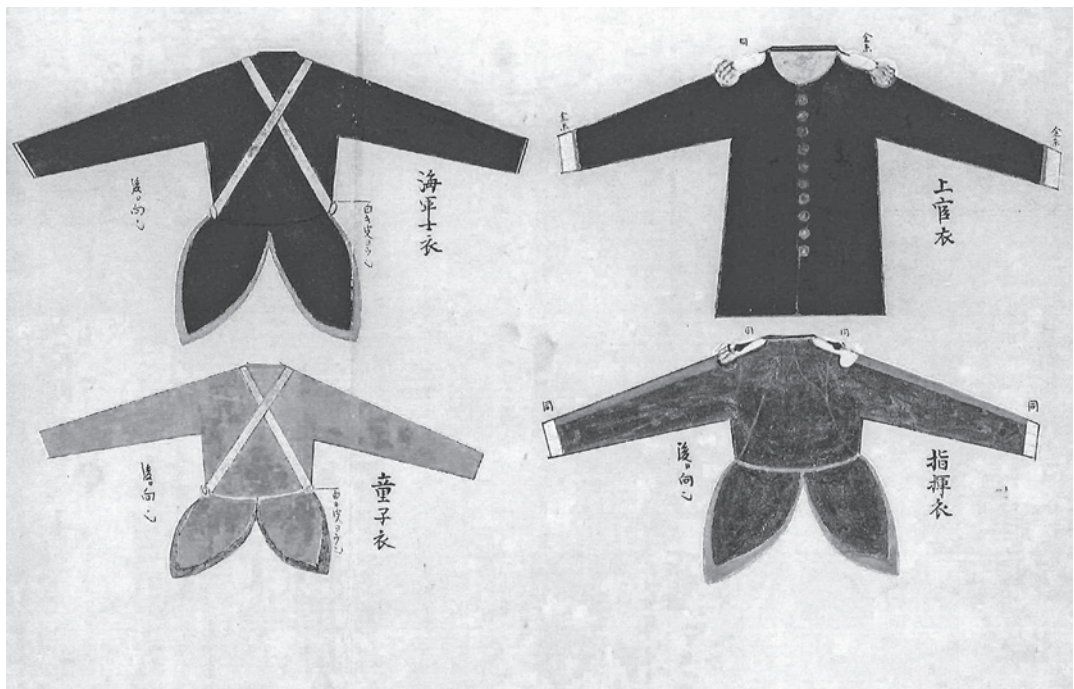
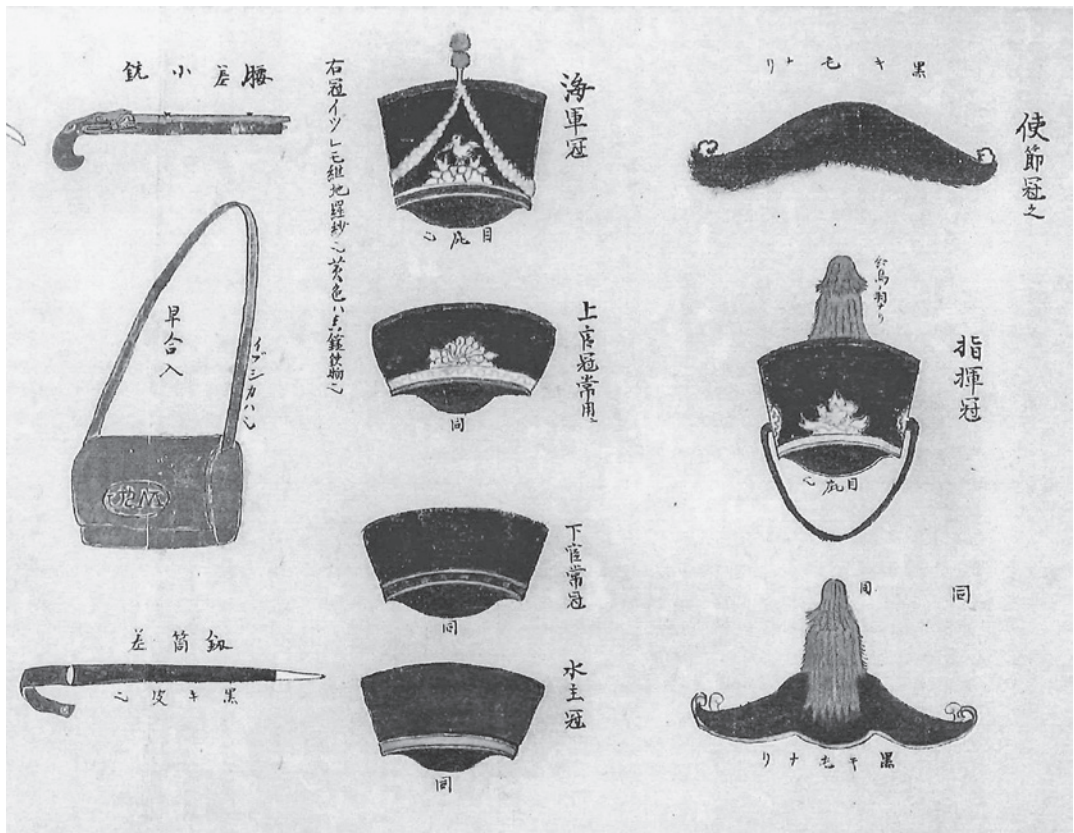
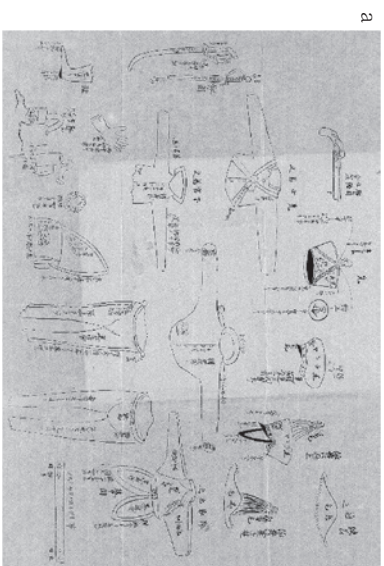
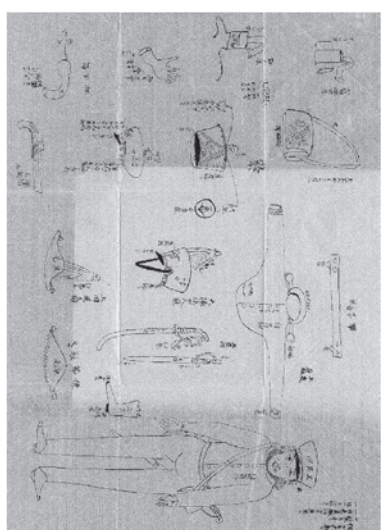


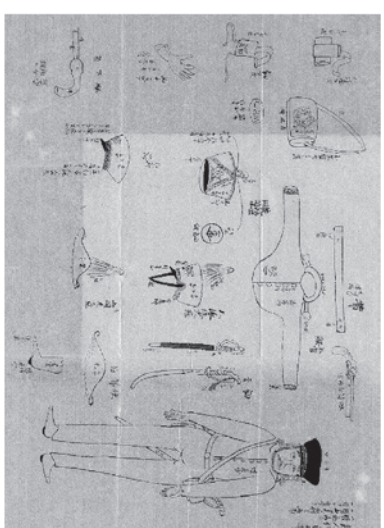
図5 「アメリカ人衣冠其外図〔異品〕」(部分) 名古屋市蓬左文庫所蔵



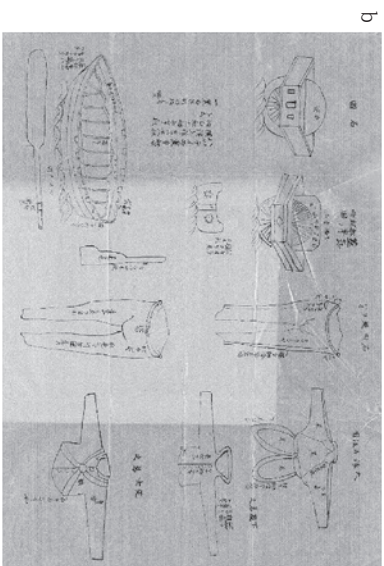
卷二—8



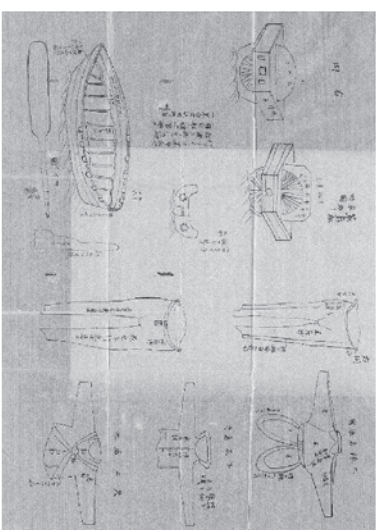
卷二—40



卷二—44



卷二—43



卷二—46

図6 a 「アメリカ人軍服・軍帽図」
b 「アメリカ人軍服・蒸気船部分・バッテリー図」

徳川慶勝御手許のペリー来航関連図像と「諸品新聞書」

i 「横浜応接見取図」二枚

このうち、aとbの図像を図6に例示した。aはアメリカ士官が描かれていないもの巻二―8)もあるが、類似のものとみなした。なお、ハイフンのあとの数字は「諸品新聞書」の細目番号である(旧稿参照)。巻二―44は朱色を施している部分もある。これ以外にも、上記に示したように軍船図や横浜応接図など、同じ図柄を描いた白描図が複数枚ある。詞書きもほとんど同じである。旧稿執筆時には、その理由が判然としなかったのだが、前章で取りあげた「異品」制作と関連づけることはできないであろうか。例えば、複数の白描図を、「異品」のように彩色され、鑑賞用に供された巻物の下絵・手本として見なす可能性である。そうすると、白描図の数々は、慶勝の命で「異品」制作に当たった絵師やその関係者たちが残したものであるということになる。ただ、それにしても同じ白描図を何枚も所持し、しかも、全く脈絡なく貼付していく慶勝の意図を論理的に説明することは、なかなか難しい。現状では実証には至らないが、一つの仮説として指摘しておきたい。

さらに、この白描図と同様の図像を、水野正信「青窓紀聞」全二〇四冊(名古屋市蓬左文庫所蔵、三三―三)の中から見出すことができることも、注目すべきことである。

周知の通り、水野正信(文化二年(一八〇五)―明治二年(一八六九))は、尾張家の重臣大道寺家(三五〇〇石)の用人を勤めた人物として知られている。否、用人としての活動よりも、文化年間から明治初年までの世相・政治・社会情報を収集・筆写した「記録者」としての姿のほうが有名である。友人でもあった儒者の細野要斎によれば、「正信常に当世の見聞を筆記するを以て樂とし、昼夜筆を把て間斷なし…夜半或は早晩の差別もなく、睡眠

は少時にして其余は筆を放たず⁽¹⁸⁾」とあるように、正信は筆が体の一部であるかのように、当世の政治・社会情勢を書き留め、これを整理しながら、友人たちと共有することを楽しんでいたのである。⁽¹⁹⁾「青窓紀聞」二〇四冊(巻一欠本)は、その膨大な記録の一部であり、研究史上それらは「風説留」と呼ばれている。⁽²⁰⁾

木村慎平氏によれば、「青窓紀聞」の内容は、ペリー来航以前は尾張のローカルな記事が中心で、記述量も年平均一冊強、多い年でも三冊程度であったのが、嘉永六年(一八五三)のペリー来航を期に記述量は一気に増加し、嘉永六年は一二冊、以降は年平均一〇冊弱になるとい⁽²¹⁾。再来航も合わせると、ペリー来航関連記事は全一六冊にも及ぶ。ペリー来航以降の幕末動乱期は、正信の晩年期五〇―六〇歳代にあたるが、彼にとって年齢は全く無関係、知的好奇心が満たされる極めて充実した時代であったに違いない。膨大な筆写量がそれを裏付けている。

そのうちの巻五九「甲寅之五 米船渡来之五 諸図」を繙くと、以下の図像が記載されている。

「軍船略図」※

「軍船図」※

「蒸気船使節船」※

「(横浜応接所図)」※

「(横浜応接見取図)」※

「(アメリカ人軍服・軍帽図)」※

「(アメリカ人軍服・蒸気船部分・バッテリー図)」※

「(梯子・縄車輪・箱図)」※

「進献(ポート砲ほか)」※

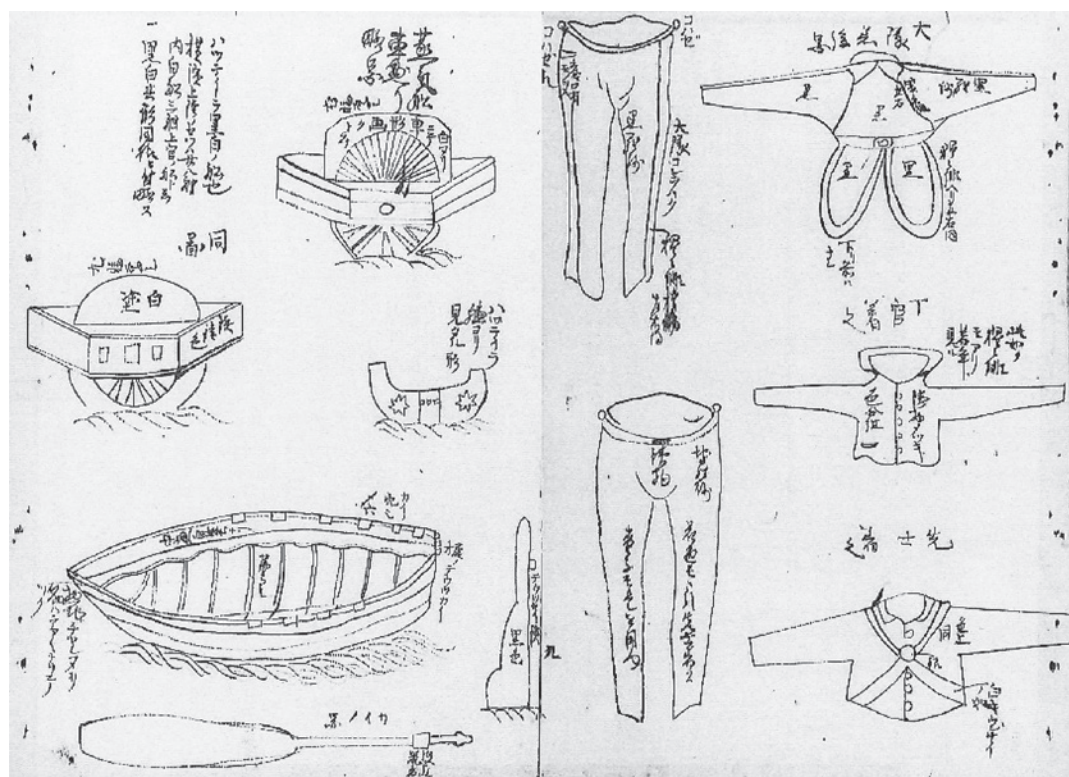
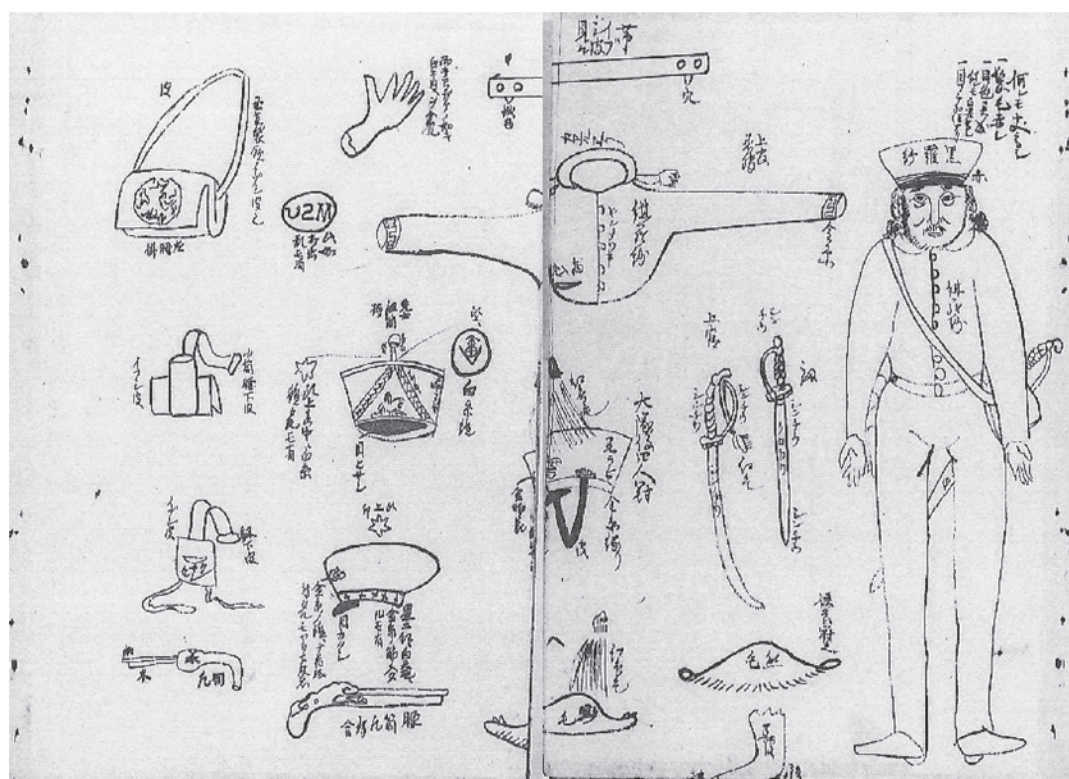


図7 「青窓紀聞」 卷59・「諸図」(部分) 名古屋市蓬左文庫所蔵

らの広汎かつ重層的なネットワークの存在を踏まえれば、ある意味で当然であった。例えば、奥村得義「松濤棹筆」巻五九⁽²⁴⁾(全巻八五のうち)には、「安政元寅年春、亜米利加船来着之節、武州久良岐郡横浜に於テ公義御応接御小屋場并亜人風俗等之略図 附品川海御台場細見図」が描かれているが(図8)、これは図7とほとんど同じものであった。

尾張藩の御掃除中間頭(二〇石)であった奥村であれば、⁽²⁵⁾慶勝御手許文庫所収の絵図を写せるわけはなく、水野が提供した絵図であることは疑いない。事実、この「松濤棹筆」巻五九の記事は、「右安政二乙卯十月三日写畢 青本」「右安政二乙卯七月十日写之 雑笈中抜筆」などと註記されているように、水野正信編著から写したものがほとんどなのであった。「青本」とは「青窓紀聞」の「青」に関わるもの。「青」に関わる水野編纂本といえ、⁽²⁶⁾「青窓謾筆」(一五冊)、「青牖叢書」(全一二巻)もある(「牖」とは「窓」の意)。「雑笈」とは水野が江戸在府中に筆写した政治関係書「資治雑笈」全九四冊のことである(いずれも名古屋市蓬左文庫所蔵)。

一方で慶勝の場合、正信が収集した情報に接する術は、御年寄加判の大道寺直寅を介した場合しか想定できない。旧稿では、「諸品新聞書」に所収される絵図の提供者として、付家老竹腰正富や、慶勝直属の探索書との関連性を指摘したが、それだけではなく、藩重臣を介した陪臣層や知識人を中心とした重層的な文化・情報ネットワークも視野に入れる必要がある⁽²⁶⁾そうである。江戸中期以降の名古屋の「文人文化」が、慶勝の情報収集活動の基盤となっていた可能性である。もとより、慶勝が水野正信やその友人たちの情報網を意識していたかどうかは別である。現段階では、双方の関係性を論じ切れるほどの材料は集まっていない。ただし、「諸品新聞書」所収の絵図の数々は、これまで別々に論じられがちであった慶勝の情報収

集活動と、陪臣たちの多様な文化活動とを接続できる可能性があることを指摘しておきたい。

おわりに

以上、徳川慶勝の御手許文庫に関して、その目録の基本分析を試みながら、ペリー来航関連図像のいくつかを検討してきた。本稿の論点をまとめると以下の通りである。

①慶勝の問題関心に即して、絵図に注目すれば、慶勝にとっての図像とは、対象物の「真」に迫るための重要な手段・道具たり得るものであった。その意味で、図像の収集は、慶勝の「写真」探究の一環であったと位置づけられる。旧稿に引き続き、改めて慶勝の西洋軍事・機械文明への高い関心を確認できるとともに、西洋風俗への興味関心もあったことをうかがわせる。

②その一方、慶勝御手許の絵図に登場する西洋人(アメリカ人)は、日本人の偏見に満ちた描かれ方をしている。西洋人と直接対峙したことがなかった慶勝であれば、そこから受ける影響は絶大で、その対外意見書、すなわち攘夷論にも少なからず影響を与えるものであったと推察できる。この点、モノへのこだわりは相当に強い慶勝であったが、人間観察においては著しく劣っていたと指摘せざるを得ない。

③「諸品新聞書」に貼付された複数の同じ図像(白描図)と、御手許文庫所収絵図との関連性について指摘した。その当否は今後追究すべき問題も少なくないが、白描図については、水野正信「青窓紀聞」所収の図像との共通性が認められ、慶勝の情報収集活動の基盤には、名古屋の文人文化と

広汎な情報ネットワークが存在していたことをうかがわせる。

そして、もう一つ、最後に指摘しておきたいのは、慶勝が「諸品新聞書」なる図像集をまとめようとした発想についてである。

これに関しては、結論を先に示すと、叔父水戸斉昭の影響が頗る大きかったことが指摘できそうである。

慶勝に対する斉昭の影響については、これまで拙稿でも指摘したことがあるが、本稿と関連づけると、外夷防禦における大船・大砲の整備・充実などに関しては、紛れもなく斉昭による感化が大きかった⁽²⁸⁾。そして、興味深いことに、博物画への関心や図像集への集約に関しても、斉昭は慶勝に先立って、「諸物会要」(公益財団法人徳川ミュージアム所蔵)なる記録画集をまとめていたのである。

「諸物会要」を調査・研究した秋山高志氏は、その特徴を次のように指摘している。「『諸物会要』は彼の多方面への関心をパノラマ風に見せる興味深い資料である。本書全二八巻は早くいえば記録画集であって、斉昭がその青年時代から晩年に至るまで、画家に命じて写生させたものや蒐集した記録画を、得るにしたがって台紙に貼り書冊としたもので、随所に斉昭自筆の書入れがあり、また、自ら描いた絵も数は少ないけれども挿入してある。(中略)目録は、天文・地理・人事・飲食・古筆・草木・禽獣・器用の八部からなっているが、目録自体に洩れが多く、本文の方も整序されていないし、絵の大きさや解説も区々であり、完成された編纂物とは決して言いがたいものである⁽²⁹⁾」。

斉昭が一生を掛けて収集・整理しただけに、慶勝の「諸品新聞書」は、冊数において遠く及ばない。しかし、「画家に命じて写生」、「蒐集した記録画」、「台紙に貼り書冊とした」、「目録自体に洩れが多く、本文の方も整

序されていない」、「完成された編纂物とは決して言いがたい」といった書物の性格は、「諸品新聞書」にもそのまま当てはまるのではないか。慶勝は、書物の性格を継承するかのように、叔父の習慣を模倣していたのであろうか。そもそも慶勝には、「諸品新聞書」以外にも、「諸物会要」の影響を感じさせる書冊がある。本稿でも指摘した「群虫真景」や「群芳帖」などの博物画・標本集がそれである。

今後、斉昭の観察眼と慶勝のそれとを比較・検討する必要もありそうである。

註

(1) 旧蓬左文庫所蔵史料二二六—六四(徳川林政史研究所所蔵)。以下、同史料群は「旧蓬左」と略称し番号を記す。また所蔵先を示さない場合は、すべて徳川林政史研究所の所蔵である。

(2) 拙稿「徳川慶勝『諸品新聞書』に関する一考察—ペリー来航・異国関連図像の紹介を兼ねて—」(徳川林政史研究所『研究紀要』五四号、『金鯢叢書』四七輯所収、二〇二〇年)。

(3) D「御直書本箱初目録」からは、「春ノ箱」「夏ノ箱」「秋ノ箱」「冬ノ箱」などと、便宜的に四季ごとにまとめた御文庫があつたようだが、幕末期にはこうした箱は見られない。

(4) 岩下哲典「改革指導者の思想的背景—徳川慶勝の書斎、直筆『目録』の分析」(『季刊日本思想史』四三号、一九九四年。のち同『幕末日本の情報活動』雄山閣、二〇〇〇年所収、二〇〇八年改訂増補版、二〇一八年普及版)。

(5) 例えば、「和蘭密話」には「あらんみつ話⁽³⁰⁾」、「戊戌封事」は「ぼじゆつはふじ⁽³¹⁾」(一般的には「ふうじ」と通用している)、「米利幹船⁽³²⁾」は「めりかはく⁽³³⁾」(「メリケン」ではない)などと、読み仮名が付されていることを指摘しておこう。

(6) 名古屋市蓬左文庫所蔵。番号三六一—四七。

(7) 名古屋市蓬左文庫には、「迭魯乙多兒戦図」(七二—三三)という絵図があり、

「尾張藩軍務局」の印が押されている。大きさは九八・二×八〇・二（cm）。これが慶勝御手許文庫にあったものかどうかは不明。

(8) 名古屋市蓬左文庫に二冊所蔵（九一—四三、七二—三七）される。いずれかが慶勝御手許文庫にあったものと思われる。

(9) 折本の内題が「以見微鏡模写図」とあることから、関連性を想起させる。

(10) 類書に「群芳帖」（旧蓬左二二六—一二二）もあり、これが押し花の標本集である。

(11) 絵図以外の④⑱⑳について、付言しよう。④「丙丁録」は、天保一二年（一八四一）に成立した徳川斉昭著の火災関連書、⑱「亜墨利加一条内密書」は、嘉永七年（一八五四）正月から四月までの浦賀・横浜・江戸情報を記した作者不明の探索書（旧稿参照）、⑳「桑名侯上書」は、溜詰の桑名城主松平定猷による嘉永六年七月二三日付意見書で、ペリー来航後の幕府からの諮問に対する答申書である（『大日本古文書 幕末外国関係文書之二』東京帝国大学、一九一〇年、五二九—五三三頁参照）。当時二〇歳ながら、將軍の職掌に基づいて通商・通信を許すべからずとした堂々たる意見書で、異国の出方次第で戦争も辞さないとする考え方は、慶勝も注目したことであろう。対する慶勝は、幕府の諮問に対して、藩重臣たちに配慮した結果、無難な内容に仕立て上げており、過激な論陣は張っていない。しかし、慶勝が御三家筆頭として、將軍の職掌を重んじる對外強硬論者であったことは、紛れもない事実であり、定猷に共鳴していたことは疑いない。だからこそ、御手許文庫に収められているのである。

(12) C「目録」記載の「別箱」にあった書物のうち、一〇件が「朱丸印」に、八件が「白丸印」、八件が「黄丸印」、六件が「轡印」、一五件が「分銅印」、一〇件が「蛇」へと振り分けられた様子が示されている。各文庫に収納されなかった書物は、「頭取江御預けに相成ル」「尾州二面頭取江御預け」などと記載されている。ここでの「頭取」は御小納戸頭取のこと。

(13) 例えば、嘉永六年一〇月から二二月の記事を収めた「江戸御留守日記」（三）尾張徳川家文書、尾二一六八）には、「異国船渡来之節防御方之儀二付戸山御庭二面調練之一巻」が収録されている。

(14) 知多半島やその内海に配備された砲台・烽火台や、船打調練に関する基本史

徳川慶勝御手許のペリー来航関連図像と「諸品新聞書」

料としては、「知多郡砲台烽火台」乾坤（二六—二〇三、名古屋市蓬左文庫所蔵）がある。文献では、大村有隣「名古屋城並尾張藩国防の研究」（助愛社、一九三七年）、岩下哲典「幕末名古屋藩の海防と藩主慶勝」（『青山学院大学文学部紀要』三三三号、一九九二年。のち註（4）前掲書に所収）、南知多町誌編さん委員会編『南知多町誌』本文編（南知多町、一九九一年）、櫻井芳昭「黒船来航と尾張の村」（『郷土文化』四七巻三三三号、名古屋郷土文化会、一九九三年）などを参照のこと。

(15) 相撲取りたちが動員される経緯や当日（嘉永七年二月二六日）の様子は、太田尚宏「使節ペリーへの贈答品と相撲取」（徳川林政史研究所監修『江戸時代の古文書を読む—ペリー来航—』東京堂出版、二〇〇九年所収）に詳しい。

(16) この史料については、註（11）参照。

(17) 横浜開港資料館編集・発行『ペリー来航と横浜』（二〇〇四年）参照。なお、この「アメリカ人図」は、名古屋博物館編集・発行『部門展 名古屋と明治維新』（一九七九年）にも掲載されている。

(18) 「律の滴感興漫筆」巻三四（名古屋市教育委員会編集・発行『名古屋叢書 第二十二巻』随筆編（五）、一九六二年、一三三頁）。

(19) 木村慎平「水野正信と『青窓紀聞』——幕末名古屋のソーシャル・ネットワーク」『羽賀祥二・名古屋市蓬左文庫編『名古屋と明治維新』』風媒社、二〇一八年所収。

(20) 「風説留」については、宮地正人「風説留から見た幕末社会の特質」（『思想』一九九三年九月号、のち同『幕末維新の社会的政治史研究』岩波書店、一九九九年所収）、保谷徹編『幕末維新論集10 幕末維新と情報』吉川弘文館、二〇〇一年）の参考文献などを参照のこと。なお、名古屋市蓬左文庫では、平成三一年（二〇一九）より『名古屋叢書四編』として「青窓紀聞」の翻刻史料集を刊行中である。

(21) 前掲註（19）参照。その他、『名古屋市蓬左文庫所蔵史料目録（1）』の木村慎平「『青窓紀聞』解題」も参照のこと。

(22) 大道寺直寅や水野正信の履歴を対照的に表示した「年表」（三二—三〇、名古屋市蓬左文庫所蔵）を参照。

(23) 「青窓紀聞」巻五九によれば、「尾州（築地）御館ハ、新に土居を築かれ、素よ

り石垣高く、屏風を立たる如きの上なれハ、堅固の一城郭の如く、八間橋はなし奉る、御橋ハ仮に乱杭を植建て、引両の御幕にて塞かれたり、下曾根金三郎殿世話御頼ニ而、折節入来、御土居出来也、紀州・姫路の引両幕ハ 公迎より拝借にや、其御家ニあるへき品とも思はれず、御浜殿ハ、此大手御門構の如く白塀にて、矢玉の狭間もあること、而已思ひしに、海岸の方ハいと低き玉縁土居にて、石垣も低くあさなる事思ひの外なり」などと、他家にくらべて自家の海岸警備の堅牢なことを故郷の家族に誇っている。

(24) 旧蓬左三一―八一・五九。

(25) 細野要齋によれば、「奥村定兵衛（名徳義・号松濤舎）、癸丑六十一歳：国中の事蹟を探索する事を好む、図類を夥しく集むと云」（「律の滴 感興漫筆」巻一三、前掲『名古屋叢書第二十巻』随筆編（二）、一九六一年、一〇三頁）とあるごとく、水野正信と同じく、還暦を過ぎても知的好奇心は衰えを知らない。奥村得義の経歴・業績については、市橋鐸「奥村得義素描」（『郷土文化』一二巻四号、一九五七年）、山田秋衛「解説」（『金城温古録（一）』、名古屋市教育局委員会編集・発行『名古屋叢書統編』第一三巻、一九六五年所収）、名古屋博物館編集・発行『名古屋城を記録せよ！』（二〇〇八年）などを参照のこと。

(26) この点に関しては、愛知県史編さん委員会編『愛知県史』資料編20・近世6学芸（愛知県、二〇一二年）が、文人の書翰を中心とした大部の史料集を刊行している。また、岸野俊彦『尾張藩社会の文化・情報・学問』（清文堂出版、二〇〇二年）ほか、岸野氏の一連の研究や、市川登紀子『尾張城下の一文人―化政、幕末、明治を生きた小寺玉晃の場合―』（『郷土文化』三三巻一号・二号、一九七七・七八年）などを参照のこと。

(27) 拙稿「嘉永・安政期における徳川慶勝の人脈と政治動向」（徳川林政史研究所『研究紀要』五一号、『金鯢叢書』四四輯所収、二〇一七年）。

(28) 斉昭の外夷認識に関しては、秋山高志「徳川斉昭の欧米地理歴史知識」（『西垣晴次先生退官記念 宗教史・地方史論纂』刀水書房、一九九四年所収）を参照のこと。

(29) 秋山高志「徳川斉昭の科学・技術知識―『諸物会要』の世界―」（沼尻源一郎編『水戸の洋学』柏書房、一九七七年所収）。

〔付記〕 名古屋市蓬左文庫所蔵史料の利用に当たっては、同文庫学芸員の今和泉大氏にお世話になった。末筆ながら記して御礼を申し上げたい。